

アイヌ語音声資料 1

—ワテケさんとサダモさん—

(沙流方言)

会話・単語

早稲田大学語学教育研究所



左：サダモ(平賀サダ)さん，右：ワテケ(鳩沢ふじの)さん (1961年)
(近藤鏡二郎氏提供)

河突孤育養筆雷拳大田藤早

目 次

凡例	7
Ukoysoytak 会話 I	12
(1) Isoytak 話	12
(2) Kusur un upaskuma tup 釧路の伝説 2 題	16
(3) Tu peker kamuy kamuy oruspe 2 明神の神話	28
Ukoysoytak 会話 II.....	46
Tumi oruspe yaykewkor upaskuma ne aye 戦争の話, 苦勞話を 言い伝えとして語る	46
Ukoysoytak 会話 III	52
(1) Isoytak 話	52
(2) Urekreku などなど	54
Ukoysoytak 会話 IV	60
Urekreku などなど, Uinere どっちが欲しいか.....	60
Usa okay pe aynu itak ani aye 単語.....	64

語り手紹介

鳩沢ふじの、アイヌ名ワテケ (Wateke). 女. 明治 23 (1890) 年 (戸籍では、明治 24 年 7 月 10 日)、沙流郡門別町富川字福満 (以前、平賀 Piraka という) に生まれた。父 Ikaysauk 氏は、山門別の奥 Hatonay (「鳩沢」と訳す) の人。明治になってから、荷葉摘 (Ninacimip) に住み、明治 31 (1898) 年の洪水以後、新平賀に移る。母チメコシさん (アイヌ名 Piraka Sipinoa) は Piraka の生まれで、洪水の後、新平賀に移る。父の母 (Hatonay の人) が亡くなるまで、家庭ではアイヌ語ばかり使っていた。14-15 歳までこの祖母と一緒に生活した。14-15 歳から 20 歳まで、平取でイギリスの伝道看護婦 Miss Bryant (1899 年より平取村で伝道、1917 年帰国) の「耶蘇学校」に学んだ。20 歳でその学校が閉鎖されて以後は、福満に帰り、日本語の中で生活していた。tusu « 巫術 » ができるので、それと農業とで生活。息子夫婦と同居。昭和 36 (1961) 年 8 月 3 日胃病で没。生前は、数多くのユーカラを伝えるすぐれた伝承者として知られていた。

平賀サダモ、アイヌ名サタモ (Satamo). 女. 明治 28 (1895) 年ごろ、福満 (Piraka) に生まれ、21 歳までそこで生活。姉妹 3 人の末。鳩沢ふじの氏の、すぐ下の異父妹。3 歳ぐらいの時、母のいとこの両親のもとにひきとられて、その老夫婦のもとで独り子として育てられた。養父 Sankerek 氏は Piraka の生まれ。養母 Tumonteno さんはウヨツペ (Uyotpe、今の福満の内にあり、Piraka の隣部落) の生まれ。8-9 歳まで、日本語を全然知らなかった。20 歳を過ぎてからは、旅芸人一座の一員として、内地 (本州) にしばらくいたこともあり、北見・釧路・樺太にいたこともある。調査当時は、勇払郡鶴川町字春日 3 区に、息子・娘との 3 人暮しだった。昭和 47 (1972) 年 8 月 1 日、平取町荷葉の、息子平野氏宅で死亡。生前、美声と博学で知られ、また、姉のワテケ氏没後の約 10 年は全道一のユーカラの大伝承者として活躍した。

は し が き

アイヌ語が日常の言語としてはとうとう使われなくなってしまった今、どのような形であれ、この言語が記録されたものは、資料として貴重である。特にアイヌ語の音声は、できる限り、語っている古老の表現やしぐさやその場の状況とともに録音・録画しておきたい。

アイヌ語の音声資料の録音は、何人かの個人といくつかの団体が持っているが、ほとんどが未公開である。文字化されたテキストは一部出始めているものの、音声が聴ける形になっているものは少ない。

私どもは、調査者や研究者が筆記した不完全な文字資料よりも、アイヌ自身が語った音声資料を重視している。そしてこれを一般の人がだれでも利用できるようにしたいと考えている。しかし資料として利用される便宜のためには文字化したテキストと解釈も添える必要がある。

公開されにくいおもな原因は、テキストの作成・印刷の費用の問題である。そこで1982年および1983年、この目的で文部省の科学研究費を申請し、補助金が得られたので、今までに採録した音声資料の疑問点を今健在のアイヌ古老によって確かめ、テープとそのテキストの公開にとりかかった。同時に、アイヌの古老に協力を願って、できるだけ多くの音声資料を録音・録画しつつある。

ここに公刊する第1巻は、1955年9月に、¹東京大学文学部言語学研究室のテープレコーダー（東通工5インチ）でオープンリールテープにスピード9.5で録音した、鳩沢ふじの(Wateke)氏と平賀サダモ(Satamo)氏の姉妹の音声資料である。二人の自由な会話4篇と単語の発音が収められている。

経過

1955年の夏、「日本の四周の言語の基礎語彙調査」（文部省科学研究費補助金による総合研究、代表服部四郎）の一環としてアイヌ語諸方言基礎語彙調査が行

われた。田村はその調査団の一員として、服部四郎・北村甫両先生に連れられて、初めて北海道へ行った。平取で鳩沢ふじの(Wateke)さんを紹介され、沙流方言の基礎語彙調査を始めた[基礎語彙調査についてくわしくは『アイヌ語方言辞典』(岩波書店、1964年)を見よ]。ワテケさんは福満に住んでおられたが、平取の親戚、平村幸雄氏宅に泊まれた。私は平村氏の妹夫婦である、高橋氏宅に滞在し、ワテケ氏は平村氏宅から通って来て下さった。私達調査員は、当時出始めたばかりのテープレコーダーを借りて持って行っていたが、テープレコーダーもテープも当時としては貴重品であったし、また団長服部四郎氏の意向もあって、調査の間は録音はしなかった。調査の記録はもっぱらノートにとった。ただ、伝説や民話を二、三録音した。

ワテケさんには父違いの妹サダモさんがいて、西へ山ひとつ越えた胆振の、鶴川町字春日に住んでおられたが、一通りの調査を終えて帰る直前に、このサダモさんをワテケさんが呼び寄せて、紹介して下さい。サダモさんは、ワテケさんにまさるとも劣らぬ、すばらしいアイヌ語の話し手で、知識も深くまた豊かで、この後、ずっと田村のいちばんの先生であった。そればかりでなく、その後、ユーカラの言葉の解釈を教えてくれる人がいないと言って困っておられた金田一京助博士に紹介したところ、まことによい先生として協力され、また外国から来た学者に身振りアイヌ語を教えて喜ばれたり、あちこちに頼まれて録音や撮影に協力するなど、年老いて動けなくなるまで、最も偉大なアイヌ語伝承者として貢献された。

1955年当時はもう日常生活はほとんど日本語ばかりで営まれていたから、ワテケさんもサダモさんもふだんはアイヌ語で話すことはほとんどなく、当日二人が久し振りに会っても、日本語のやりとりが出てくるのだった。しかし年配の人達の間では、若い人にきかれたくない秘密の話をする時などにアイヌ語を口にすることもあり、また、集まって昔話などをしたりきいたりすることもあるとのことだった。

その程度にしかアイヌ語は使われていなかったにもかかわらず、二人のアイヌ語の能力は完全だった。しかもワテケさんは、1ヵ月の語彙調査の間に、忘れて

いたこともずいぶん思い出し、日本語をまぜないで、アイヌ語だけで話すことができるようになっていた。

せつかくこの姉妹が久し振りに会った機会を利用して、アイヌ語で会話をさせていただき、それをテープに録音することにした。サダモさんは当日急にアイヌ語を話させられたわけだが、それにしても日本語はほとんどまざっていない。おどろくべき能力である。テーマは指定せず、二人が思いつくままに自由に話していただいた。最初は多少ぎこちないが、次第になれて自然な会話になっていく。録音は二日間にわたって行った。これが、Ukoysoytak (会話) I~IV である。章分けは田村の考えで、きりのよいところで区切った。同年(1955)秋、関東各地を巡業するアイヌ民族芸能団の一行の中に、ワテケさんもサダモさんも加わって来られた。田村はこのグループについて歩き、旅館や民家やお寺と一緒に泊まって、アイヌ語の会話を習い、文法調査をするとともに、夏に録音したものの音声を確認し、解釈を教わってつけ、その年の12月に提出した卒業論文に付録としてつけた。その後数年にわたって細かい点を更に確かめたり修正したりしてきた。

一方、上述のように、基礎語彙調査は、録音せずに行ったが、田村は単語の発音の録音も必要だと考えたので、調査が終ったあとの同じ最後の二日間、単語もいくつか録音した。それには、主として、当時使っていた「第1次調査表」『アイヌ語方言辞典』(前掲)序説参照]の項目の日本語を田村が読み上げて、サダモさん(前半)、ワテケさん(主に後半)がそれに当たるアイヌ語の訳語としてとっさに思いついた語を言う、という方法で録音した。これが「単語」である。

したがってこれは決して語彙調査ではない。つまりこのテープは、「基礎語彙テープ」として作ったものではなく、「いくつかの単語の発音」の録音をめざしたものにすぎない。読み上げている日本語とその場でとっさに訳したアイヌ語とが必ずしも合っていない場合もある。

しかし、音声資料としては貴重なものであるから、これもここに一緒に公刊する次第である。

なお、このテープをもとにして、配列順を多少変え、テープにない項目も補って編集した『アイヌ語基礎語彙』（「語研教材選書」(31), 1983年）が出ている。

この第1巻のテープ編集には、早稲田大学語学教育研究所技手、水野信義氏の協力を得た。また、テキストの編集には早稲田大学大学院文学研究科学生、児島恭子さん、学習院大学大学院人文科学研究科学生、田中聖子さんの協力を得た。

このテープ録音には1955年度文部省科学研究費（総合研究、代表服部四郎）、その後の数回の補足調査に早稲田大学指定・特定課題研究費、テキストの仕上げには1982・1983年度文部省科学研究費補助金（一般研究 C、田村すず子）のそれぞれ一部を使用した。

1983年12月

田村すず子

凡 例

I アイヌ語の表記法

1 文字

- (a) 基本的には音韻表記だが、語頭と母音間の /' / は省略してある。
- (b) 固有名詞だけ大文字で始め、他はたとえ文頭でも小文字を使っている。
- (c) アイヌ語の文中に日本語が出てくる場合はイタリックで表記した。アイヌ語にない音は次のように表記した。

g [ŋ] (ガ行鼻音の子音) ts [ts] (ツの子音)

z [z~dz~ʒ~dʒ] (ザ行子音) ō [o:] (オの長音)

2 音素交替

子音で終わる語の語末子音が次の語の語頭子音の影響で変わって発音されることがある。主な交替には次のようなものがある。

—r + t— → —tt—

例 kukor 私が持つ + tasiro 山刀 → /kukottasiro/ 私の山刀

—r + c— → —tc—

例 kukor 私が持つ + cise 家 → /kukotcise/ 私の家

—r + n— → —nn—

例 kukor 私が持つ + nonno 花 → /kukonnonno/ 私の花

—r + r— → —nr—

例 kukor 私が持つ + rusuy ...したい → /kukonrusuy/ 私がほしい

—n + s— → —ys—

例 pon 小さい + sísam 和人 → /poysisam/ 小さい和人

後ろ側の語の語頭子音が変わることもある

—m/n + w— → —mm—

例 isam ない + wa ...して → /isamma/ なくて
/h/ と /' / は子音のあとではアクセントがないときは落ちることが多い。

例 an ある + híne ...して → /anine/ あって
an ある + a ...した → /ána/ あった

これらの交替は最近では必ずしも起こらないこともある。例えば, kukor cise の r が r のまま発音されることもある。特にゆっくり発音した場合には, そうなりやすい。

一語の中(一続きに書いている語の中)では, 実際に発音されたとおりに表記し,

例 weyyaysukupka (=wen-yaysukupka)

語と語の間(スペースをあけて分かち書きした部分)では, 各語の単独での発音(交替の起こらない形)のまま表記した。

例 inomian sir nukar rusuypa

r は /n/ の前で /n/ に交替するという形態音韻規則によって, sir は /sin/, nukar は /nukan/ と発音されているが, それぞれ sir, nukar と表記してある。

実際の発音はテープで聴けるので, テキストでは, 各語を同定するための便宜をねらったのである。

非常にしばしば出てくる, 表記と実際の発音の違いの例を二, 三挙げる。

表記	発音
or ta	/otta/
an wa	/amma/
ene an hi	/eneani/

3 分かち書き

合成語, 複合語と認められる場合も, なるべく離して書ける限り離して書くようにしてある。ぱっと見てわかりやすくするためである。

4 句読点

(a) 文の終りの「.」「!」「?」は一般の慣例による。

(b) 息つき，およびこれに準ずる場合「,」をつけてある．必ずしも意味上，統語上の切れ目とは一致しない．

5 アクセント

多くの場合，閉音節では第1音節が高い，開音節では第1音節が低く，第2音節が高くなる．この一般的傾向と異なる特別の場合にだけ，アクセント記号を母音字の上につけてある．

II. 会話の日本語訳

意味がなんとかわかる限り，極力逐語訳（直訳）してある．必要不可欠な場合のみ，ごく簡単な注をつけた．

III 単語

単語は，テープには日本語（項目）—アイヌ語（訳）の順で入っているが，テキストでは左にアイヌ語の文字化したものを書き，右にその日本語訳をそえた．

訳は，録音前1ヵ月の語彙調査，およびその後数年にわたる調査で確認した語の意味を，日本語で簡潔に表したものである．前述のように読み上げている日本語の項目とは必ずしも一致しない場合がある．その場合，読み上げている日本語項目を [] に入れて添えた．

なお，使用略号・記号は次の通り．

単 単数形

複 複数形

自 自動詞

他 他動詞

1 単 主語が1人称単数の時の形，«私が...» «私の...»

不定 主語が不定人称の時の形，«不定の人が...，あなたも私も...，あなた様が...»

概 概念形

所 所属形

[] 調査の際に読み上げた日本語項目

— 無回答の場合

() 日本語の単語の借用で、それがまだアイヌ語の語彙として定着していない語

“ ” 答えのアイヌ語が訳語だけではなく、説明になっている場合